國學院大學学術情報リポジトリ

〔紹介〕上野誠著『折口信夫的思考 越境する民俗学者』

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小川, 直之, Ogawa, Naoyuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000489

紹介

上野誠著『折口信夫的思考　越境する民俗学者』

小川直之

奈良大学教授（文学部国文学科）の上野誠氏は、この著書の直後に『万葉文化論』（ミネルヴァ書房、平成三〇年一二月三〇日）の大冊を出しているように、よく知られた万葉研究者である。『万葉集』の歌を素材にした古代文化研究に関する著書は多い。

『折口信夫的思考』でも、第Ⅰ部は「古典研究の未来」として「万葉研究の現状と研究戦略」「万葉民俗学の可能性を探る」などの章があって、この著書でも『万葉集』を研究の足場の一つにしている。書冊の内容は、Ⅰ部に続く第Ⅱ部は「折口信夫的思考」、第Ⅲ部は「小説家・折口信夫」、第Ⅳ部は「戦時下の折口信夫」である。折口信夫の学術研究、小説「神の嫁」「生き口を問ふ女」を論じ、折口に関するエピソードとして有名な「アラヒトガミ事件」を論じている。「アラヒトガミ事件」については、今までは紹介程度だったので、その事実確認も含めて検討されたのはこれが初めてかもしれない。

要点だけあげて紹介しておくと、「折口信夫的思考」の書名で一見折口信夫論のように思えるが、この書は折口の研究や作品を論じながら、自らの研究の道筋を提示したものといえる。それは、「越境する」ということで、国文学者でありつつ、民俗学者・神道学者であり、歌人で作家でもあって、いくつもの分野に越境した折口の思考を見直しながら、上野自身も万葉研究を民俗学や歴史学、考古学に越境して行っており、さらに本書では冒頭に「序詩」を記し、さらに折口の口訳万葉集の仕事を講談にして描いた作品、アラヒトガミ事件を素材にした小説を収録し、文芸創作にも越境しているからである。「越境する」の後の「民俗学者」は、折口のことであろうが、読みによっては上野であるともいえる。

そして、注目すべきは古典研究の未来に向けた「研究戦略」を示していることである。学界や社会に対して自分の研究をどう位置づけるのかということで、上野氏にとっては万葉研究を軸に他に越境しての「万葉文化論」が戦略で、これが総論を語る力になるという。人文学の社会力を取り戻すには絶対的に必要なことだが、私の知る限りではこれをいう研究者は少ない。

（B6判、三六八頁、青土社、二〇一八年十二月発行、二八〇〇円＋税）